

平成 21 年度「専修学校教育重点支援プラン」成果報告書

事業名	e-learning による自分史の書ける学生を育成するための教材開発とその実践		
法人名	学校法人 国際共立学園		
学校名	国際理容美容専門学校		
代表者	理事長 中村 文雄	担当者 連絡先	若松 伸佳 TEL 03-5850-7201
1. 事業の概要			
<p>本事業は、専門学校教育の中で未開拓な OUTPUT 教育を、「書くこと」に定位して開拓する取り組みである。</p> <p>■取り組み内容の諸項目は以下の通り。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 自分史のストーリーという具体的なテーマを取り上げる。 2) 自分史を専門学校以前（なぜ、私は専門学校で学ぶことを選んだのか）、専門学校で学んだこと、専門学校で学んだことを就職する会社でどう活かしていくかの三点の観点からアプローチする。 3) 最終的には、自分+専門的な知識・技術+自分の社会性の三つの観点から、自分史を書ける能力を開発する。 4) 特に大学生との就職面接戦線で、「言葉」に負ける傾向が強い専門学校生をサポートできる e-learning 教材を開発する。 			
2. 事業の実施に関する項目			
①開発したプログラム・教材・教育手法等の概要			
<p>■自己ブランディング文を書くための e-learning 教材の概要</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 目標：就職活動のための 1000 文字の自己ブランディング文が書けること (2) 時間：90分×6 コマ (3) 環境：WindowsXP 以降のネット接続が可能なパソコン (4) 内容：入学以前の私、在学中の私、卒業後の私を題材に執筆練習 <p>■進捗管理と OUTPUT の安定化のための工夫</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 時間と全体を意識させる仕組みを導入 (2) 余った時間（個人差）を埋める仕組みを導入 (3) 自分の文章を再考する仕組みを導入 (4) 進捗がリアルタイムに見える仕組みを導入 (5) コメントがリアルタイムに書き込める仕組みを導入 (6) 回答者の回答文を共有する仕組みを導入 			

②ニーズ調査等（手法・期間・効果）
③実証講座の状況
<p>■教材の実践と結果</p> <p>(1)日時：平成21年12月上旬から現在に至る</p> <p>(2)受講者：114名（2月20日現在でゴール到達者）</p> <p>(3)結果：それぞれの学生が苦労をしながらもスクーリングの中で行われる e-learning であるためにゴールに到達する学生が多かった。また、遠隔地からの参加者は、挫折をしてしまう傾向が見られた。</p>
④その他
3. 事業の評価に関する項目
①目的・重点事項の達成状況
<p>■目標達成および課題</p> <p>1. 本教材を通して1000文字程度の長文を学生に書かせる試みとしてはほぼ達成したといえる。</p> <p>2. この教材からの OUTPUT を利用して、就職エントリーシートを書くことが出来るといった効果も伝えられた。</p> <p>3. ソフトウェアの汎用性の検証が足りていない。</p> <p>4. 1000文字の長文を1度書いたからといって、文書が書けるようになったとは評価できない。繰り返し利用や毎日書くことが出来るような工夫等までは至らなかった。</p> <p>5. 学生からは自己理解につながったことや職業について意識した等の前向きな回答が多く寄せられたことは大きな成果であり、その意味での目標は達成できた。今後さらなる発展や普及が望まれる。</p>
②事業の成果
<p>■事業の成果として、本事業を通じ以下のことが分かった。</p> <p>1. 学生は、1000文字レベルの文書は長文と感じる。</p> <p>2. 学生は、自分の長所や短所など自分のことを文書で伝えることは得意ではない。</p> <p>3. アドバイスや過去に自分が書いた文書また他者が書いた文書などの直接的な助言は非常に役に立つと感じている。</p> <p>4. 時間制限や文字制限などの制約要件についてあまり好まない。</p> <p>5. この学習により自己の長所や就職に対するイメージを持った学生は多く繰り返し学習することが望まれる。</p> <p>6. この学習が役に立ったと思っている学生は62.3%。文書を書くのが苦手な学生がエントリーレベルで文書作成を学ぶには効果があると推測できる。</p>

③次年度以降における課題・展開

■今後の課題

1. Windows 環境からのアプローチではなく Mac 環境からのアプローチなども行い、安定性を増す必要がある。
2. 1000 文字の長文を 1 度書いたからといって、文書が書けるようになったとは評価できない。繰り返し利用や毎日書くことが出来るような工夫等を検討する必要がある。
3. 他者が書いた文書を閲覧することが出来ることやブログや twitter との連動性なども視野に入れて今後検討するべきである。
4. スクリーニングの中で行われる e-learning 教育ばかりでなく、自宅からでも学習できるようにコンテンツを見直す必要がある。
5. 教材の有効性を感じている学校も見受けられ、システムを広くかつ有効に利用して頂くために、運用面での資金的な調達が課題となる。

④成果の普及

■成果報告会

成果の報告は、全国専門学校情報教育協会が行う「専修学校フォーラム 2010」において発表した。

日時：平成 22 年 2 月 23 日（火）

場所：中野サンプラザ

参加者：187 名

■次年度以降の本教材

次年度以降の本教材の利用は、既に数校から次年度より実際に学校全体で教材を利用したいとの要望もあり今後広く活用されていく可能性がある。

また、サーバーもクラウド環境の中で設置できるように工夫してあるために、全国専門学校情報教育協会の協力を得て、今後も運用を続けていくことを検討している。